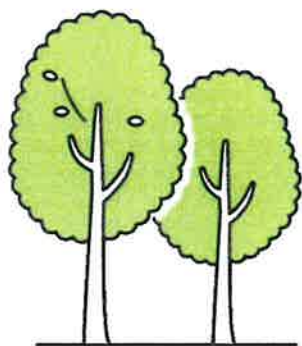




令和5年度
コミュニティ・ソーシャルワーカー(CSW)
生活支援コーディネーター
活動報告書



社会福祉法人 目黒区社会福祉協議会



目 次

はじめに	1
1 活動概要	1
2 目黒区の地域特性	2
3 コミュニティ・ソーシャルワーカーの取組 生活支援コーディネーターの取組	
個別相談事例	6
地域相談事例	8
全域での取組	12
目黒区における協議体	14
協議体の取組	14
4 活動実績	18
5 まとめ	21
6 今後の展望	21



はじめに

人口減少や少子高齢化等を背景とした、地域コミュニティの希薄化、生活課題の複雑化・複合化といった地域課題に対応するため、福祉の分野を超え、制度の狭間にある方にも対応できる新たな支援の仕組みが必要となってきました。

目黒区社会福祉協議会では、そのような課題に対応し、地域共生社会の実現を目指して、個別課題の支援から地域に共通する課題を引き出し、住民とともに地域の課題に取り組むコミュニティソーシャルワークの推進を重点事業として、組織全体で取り組んでいます。

目黒区からの委託を受け、平成29年度から生活支援コーディネーターを配置し、令和3年度からコミュニティ・ソーシャルワーカー（以下、「CSW」という。）を兼務として加え、計画的に増員してきました。

令和5年度は前年度から2人増員し、10人のCSWを5地区の生活圏域に2人ずつ配置した本格的な事業展開となりました。併せて、目黒区が令和6年度から実施する重層的支援体制整備事業に向けて関係機関等の会議へ参加するなど関係機関との連携強化に努めました。

令和5年5月に、新型コロナウイルス感染症が感染症法上の5類に変更されたことから、地域の祭や催しなどの地域活動の再開が多くみられ、それに伴ってCSWが地域へ出る機会が増え、地域関係者との関係づくり等の地域への働きかけを進めることができました。

この一年間、CSW／生活支援コーディネーターが地域課題にどのようにアプローチしてきたのか、生活支援体制整備事業の第2層協議体がどのような活動をしてきたのかなど、昨年度に引き続き、活動報告書としてまとめましたので、ご高覧いただければ幸いです。

目黒区社会福祉協議会 事務局長 長崎 隆

1 活動概要

■コミュニティ・ソーシャルワーカー（コミュニティソーシャルワーク事業）

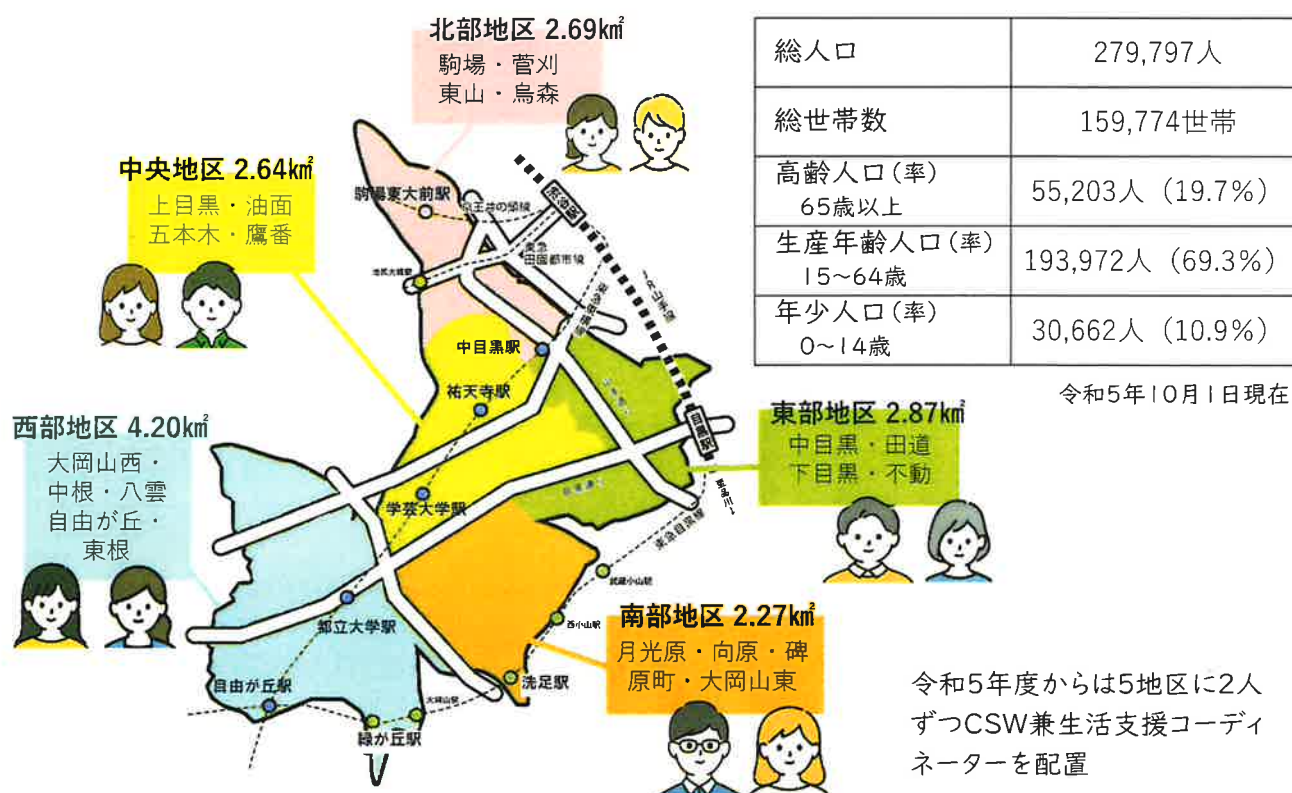
コミュニティ・ソーシャルワーカー（CSW）は、高齢者・障害者・子どもなど全ての人々を対象に、制度の狭間にある日常生活上の困り事や心配事を受け止め、様々な関係機関などにつなぐ活動をしています。積極的に本人のもとに出向き、そのかたの思いを受け止めて必要な情報を提供しながら、そのかたに寄り添った伴走支援を行います。地域の様々な困りごとに対して、関係機関・団体や行政と連携して、地域の中での解決に向けた支援を行っています。

■生活支援コーディネーター（生活支援体制整備事業）

介護保険法に基づく事業で、地域住民や団体、企業の関係者など様々な人々と連携しながら、日常生活上の支援体制の充実・強化及び高齢者の社会参加の推進を一体的に図るために、「生活支援コーディネーター」と「協議体」が創設されました。

目黒区では、5つの日常生活圏域（地区）にそれぞれ協議体を設置しています。生活支援コーディネーターは、協議体と連動しながら、社会資源の把握や関係団体との顔の見える関係をつくり、高齢者の生活上のニーズとマッチングや生活支援サービスの創出を目指して地域の支え合い活動を推進する役割を担っています。

2 目黒区の地域特性



地区	北部	東部	中央	南部	西部
人口(人)	46,641人	58,166人	54,876人	50,206人	69,908人
世帯数(世帯)	26,806世帯	34,098世帯	33,069世帯	27,656世帯	38,145世帯
一世帯当たりの人数 (人口÷世帯数)	1.74人	1.71人	1.66人	1.82人	1.83人
高齢者数	7,581人	10,561人	11,596人	10,868人	14,597人
高齢化率	16.3%	18.2%	21.1%	21.6%	20.9%
介護保険 要介護等認定者数	1,548人	2,307人	2,677人	2,386人	3,025人

令和5年10月1日現在

目黒区では、区民の日常生活に関わりの深い22の住区をもとに、5つの地区を設定しています。最も人口が多いのは西部地区で、高齢者数と1世帯あたりの人数も最も多くなっています。中央地区は、1世帯あたりの人数が最も少なく、単身世帯の割合が高いことが分かります。高齢化率が最も高いのは南部地区で、最も低い北部地区とは5ポイント以上の開きがあります。

目黒区の高齢化率は19.7%で近年横ばいで推移しています。東京23区の高齢化率22.2%(※令和5年9月15日現在)より2.5ポイント低くなっていますが、後期高齢者の占める割合は年々増加傾向にあります。これに伴って、介護保険要介護等認定者数も上昇傾向にあります。3年前と比較して高齢者人口が増加したのは、北部と西部の2地区でしたが、要介護等認定者数は全ての地区で増加しています。

北部地区

世田谷区と渋谷区に隣接する地区で、目黒川が流れ、低地と台地からなる起伏に富んだ地形となっています。東京大学駒場キャンパスや東京音楽大学中目黒・代官山キャンパスなどの教育施設が立地するほか、駒場公園、菅刈公園、東山公園などの大規模な公園があることから緑が豊かな地域でもあります。池尻大橋駅や中目黒駅の周辺や山手通り、目黒川沿いなどを中心に個性的な店舗や施設などの立地が進み、多くの人が訪れる魅力があるまちとなっています。

令和5年度は、上目黒氷川神社のご鎮座450年に伴い、旧上目黒村だった地域一帯の郷土まつりとして、「一心行列」が行われました。

東部地区

目黒川が流れ、低地と台地からなる起伏に富んだ地形が特徴です。中目黒公園や林試の森公園などの大きい公園があり、正覚寺、大圓寺、大鳥神社、目黒不動尊などの歴史・文化的資源が多くあります。中目黒駅や目黒駅周辺、山手通りや目黒通りの沿道、目黒川沿いなどを中心に商業施設や企業が存在し、働く人が行き交うまちとなっています。令和5年4月には目黒川舟入場広場がFUNAIRI-BAとしてリニューアルし、交流型コワーキングスペースを備えた地域の新たな交流の場が誕生しています。令和6年3月から、目黒区総合庁舎と目黒駅間を運行ルートとする区内初の地域交通バス「さんまバス」の実証運行が始まりました。

中央地区

坂の多い目黒区の中で、概ね平坦な台地上にあります。著名な場所として、祐天寺や碑文谷公園が挙げられます。低層の住宅が多いことが特徴となっています。祐天寺駅や学芸大学駅の周辺では商店等の入れ替えも目立つ中、昔ながらの商店も代替わりをしながら続いています。

令和5年11月にはPark-PFI実施※を想定した、公民連携による碑文谷公園の魅力アップの取組として、GAKUDAI PARK MARKETが開催されました。「みんなでつくる学大高架下プロジェクト」とともに学芸大学駅周辺の変化がみられています。

※都市公園の整備において民間活力の導入を促進することを目的にした公募設置管理制度

南部地区

大田区、品川区に隣接する地区で、人口密度が区内で最も高く、木造住宅が多い地域があるなど、住宅の割合が高い特徴のある地区です。木造住宅密集地域整備事業等により、安心安全で快適に住み続けられるまちづくりが進められています。すずめのお宿緑地公園や清水池公園など特色のある公園があるほか、碑文谷八幡宮や円融寺、サレジオ教会など歴史的な建造物も多くあります。中学校4校の統合計画が進行しており、地区内では第七・第八・第九中学校が対象となっています（※第十一中は西部地区）。令和5年12月には統合新校の名称（目黒南中学校・目黒西中学校）が公募により決定しました。

西部地区

世田谷区と大田区に隣接する地区で、地区内は低層の住宅地となっています。複合施設「めぐろ区民キャンパス」は、大規模ホールや体育館、図書館等を有し、文化芸術・スポーツに関するイベントや季節行事が盛んに行われています。区内最大の商業集積地である自由が丘駅周辺地区は流行に敏感なファッションや雑貨、カフェなど多様な店舗があり、多くの人が訪れるおしゃれな雰囲気地域です。

令和5年11月からは、自由が丘駅前の大規模な再開発工事が始まり、景色が大きく変わりつつあります。



目黒区総合庁舎 西口ロビー展
令和6年3月15日～3月21日



めぐろプレーパークキャラバン隊



竹の子クラブ輪投げ大会
(中央体育館)



出張相談 (祐天寺・カトリック碑文谷教会)

C

ちいさなことから

S

そうだん うけます

W

わたしたちへ！

3 コミュニティ・ソーシャルワーカーの取組 生活支援コーディネーターの取組

【個別相談事例① アウトリーチ・参加支援】

週1回の電話相談を継続的行ったことで、本人と対面できた事例

●相談の概要

本人	60代女性（Aさん）		
相談者	区職員	内容	継続的に傾聴対応してほしい
状況	Aさんは数年前に配偶者や親族を亡くされたことで、精神的に不安定となり一人であることに不安を感じていました。訪問や約束をしておの対面、時間の決まっている会には参加できずにいるため、傾聴対応としてCSWに関わってほしいと相談がありました。身近な人との死別を経験した人にはグリーフケア※の必要性もあることから、傾聴対応をすることとなりました。 ※死別によって悲嘆（グリーフ）している家族（遺族）に寄り添うサポートのこと。		

●支援の経過

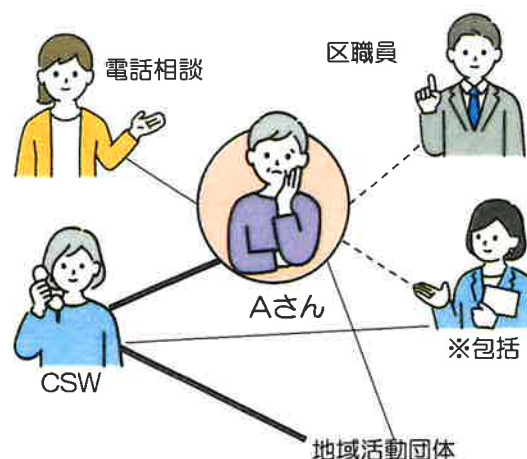
支援開始	3～5か月後	11か月後	現在
・週1回、15分程度の傾聴電話を開始する。 ・開始当初、苗字、年代、町名以上の情報は教えてもらえなかった。 ・急逝した配偶者との思い出話や、不安からくる手の震えや発汗などの自覚症状、1日をどのように過ごしたかなどを傾聴する。	・年末年始やゴールデンウィークなど連休でも相談可能な「いのちの電話」、「よりそいホットライン」などの情報を提供する。 ・CSWの顔写真がめぐろ区報に掲載されたことから、親しみを持たれるようになる。 ・少しずつ、自宅周辺の情報を教えてくれるようになる。	・外出先でCSWと顔を合わせる場面を期待する声が聞かれるようになる。 ・身近な地域情報の提供や安否確認を目的に、住所と電話番号を聞き取ることができる。連休に向けて「よりそいホットライン」「#9999」情報をポスティングする。	・自宅周辺で活動する団体にCSWが訪問することを伝え、本人との面談が実現した。 ・CSWが地域活動団体に外向くときは、対面での面談が出来るようになる。

●これまでの成果

本人の気持ちに寄り添いながら、無理に社会参加へつなげず、傾聴を続けたことで、初めは警戒していた本人も、徐々に心を開き、住所や電話番号を開示。本人との対面に至ることができました。

●今後の方向性

今後も引き続き週1回の傾聴を続け、本人の精神的安定を図るとともに、自宅訪問での面談や社会資源への参加支援などを行っていきたいと考えています。また、包括支援センター等関係機関と連携し、専門職での見守りも行っていきます。



※包括・・・地域包括支援センター

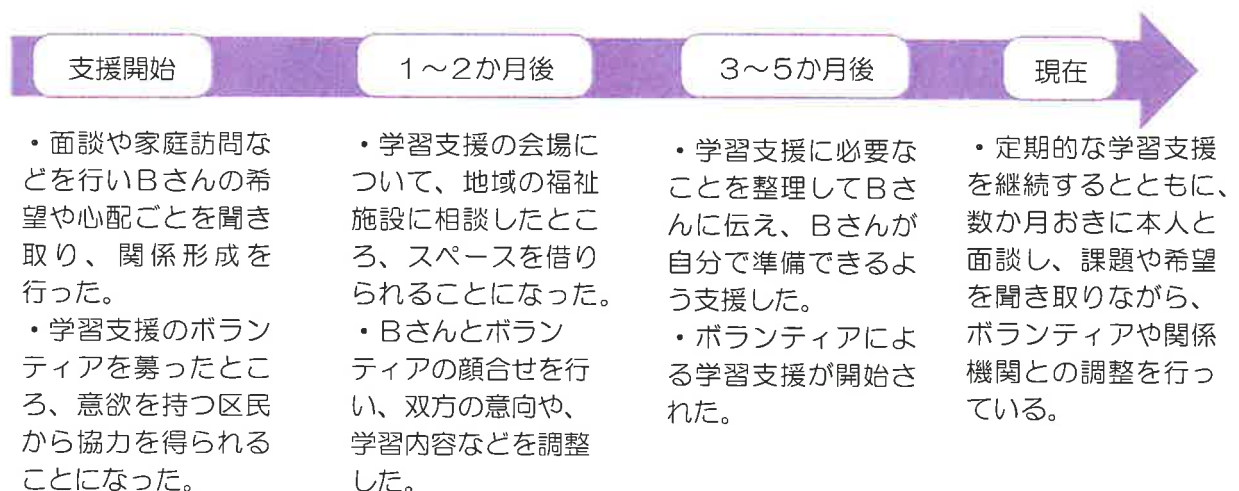
【個別相談事例② 参加支援】

区民ボランティアの協力や、福祉施設の場所提供により、学習支援につながった事例

●相談の概要

本人	20代男性（Bさん）		
相談者	本人	内容	学習支援をしてほしい
状況	Bさんは学生時代に目黒区による学習支援を受けていましたが、高校卒業により支援の対象ではなくなりました。就労に向けて学習の継続を希望するBさんから相談を受け、CSWが区民ボランティアや福祉施設へ繋いだことで、学習支援が実現しました。		

●支援の経過

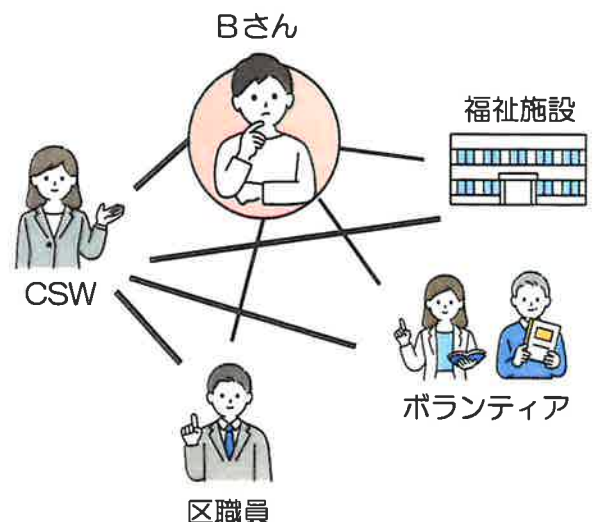


●これまでの成果

区民ボランティアの協力と、福祉施設によるスペース活用の取組によって、Bさんは学習支援を受けられるようになりました。またボランティアにとっても、地域でやりがいを感じられる活動に参加する機会となりました。

●今後の方向性

Bさんには、学習したことを活かして地域のグループ活動に参加したいという新しい目標ができました。引き続き地域の活動団体やボランティア、関連機関と連携しながら、参加支援をしていきます。



【地域相談事例① 地域づくり・参加支援】

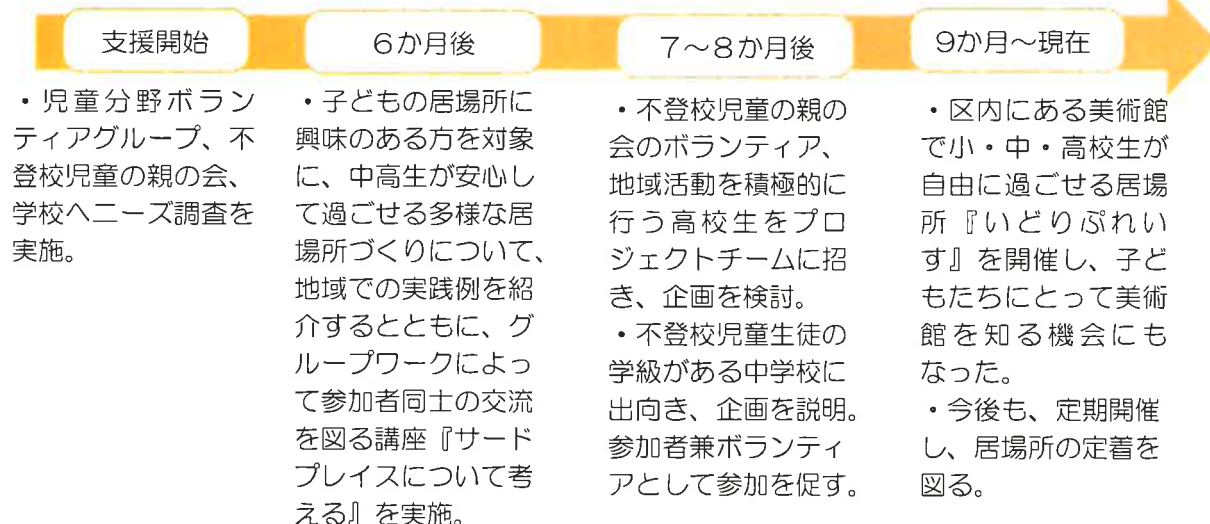
子どもの多様な居場所（サードプレイス）

づくりに向けて

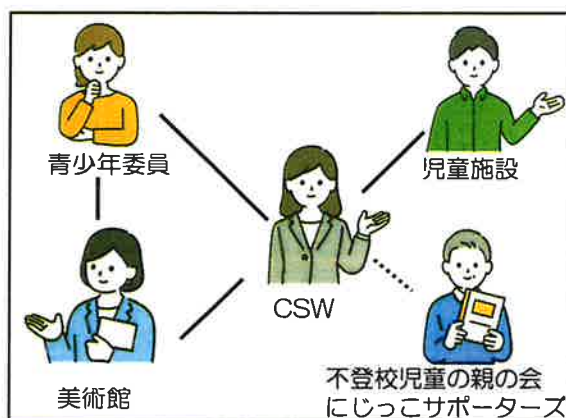
●相談の概要

相談者	区青少年委員
内容	地域に子どもの居場所をつくりたい
状況	児童分野における連携強化を図るため、関係機関・団体等に出向きヒアリングを行いました。低年齢化が著しい不登校児童は年々増加傾向にあり、家庭や学校以外の多様な居場所づくりが必要という地域課題を発掘できました。そんな中、区青少年委員から美術館での子どもの居場所づくりについて相談がありました。美術館は安心・安全な静かな空間であり、子どもたちに地域の身近な居場所として利用してほしいという思いから、居場所づくりに向けて協働することとなりました。

●支援の経過



●サードプレイス講座時



●いどりぶれいす開催時



●団体からの声



元目黒区青少年委員 宗方氏

青少年委員として活動していた時、目黒区社協で行われていた「サードプレイス」の講演会に参加し、子どもたちの居場所について改めて考える機会を得ました。

一方、地元にある美術館を子どもの居場所として活用できないかとお誘いが田道住区住民会議にあり、目黒区社協、美術館、他の団体とのコラボレーションが始まりました。子どもたちは「サードプレイス」を持つことで、豊かな経験や新たな出会いを得、その結果、気楽に過ごせる時間が持てると感じています。

今後もサードプレイスが広がるよう、目黒区社協様の活躍を期待し協力していきたいと思っています。

不登校児童の親の会 にじっこサポーターズ 庄司氏

不登校の問題としてよく出てくるのが「孤立」です。本人ももちろんのこと、その保護者も不登校期間が延びるにつれ、徐々に周囲と疎遠になってしまうことがあります。しかし、子どもの居場所を通じて、保護者もそこから周囲と繋がりを持てるきっかけになったり、保護者の居場所を通じて子どもが周囲と繋がりを持てるきっかけになったりすることもあります。すでに『いどりぶれいす』でも、とある保護者から「他の保護者と繋がるきっかけになった」と嬉しい報告を頂きました。

今後とも、『いどりぶれいす』をはじめとして、いろいろな居場所が目黒区でも広がっていくことを願っています。



●成果

本企画を通して、当事者や家族だけでなく学校、支援者、地域住民などさまざまな立場の人と関わり、顔の見える関係や協力関係を築くことができたほか、子どもが自由に過ごせる場を創出することができました。

実際に学校に行きたくない気持ちを抱える児童の参加があり、美術館という居場所について知ってもらう機会になりました。プログラムを通して美術館のスタッフやボランティアと関わり多世代交流を図ることができました。写真に関連するプログラムを設けたことで、カメラや写真について興味関心を持ち、感性を育む機会となりました。

●今後の方向性

自宅と学校以外のサードプレイスとして定着を図るため、令和6年度も継続してイベントを企画・開催していきます。また開催日を平日と休日に分けて実施し、多様な子どもたちの参加しやすい環境をつくります。

今後も積極的に学校や児童施設等に出向き、ネットワークを構築し、子どものサードプレイスの普及啓発を図っていきます。



▲サードプレイスを考える会の様子



▲いどりぶれいすでは多様なワークショップを実施

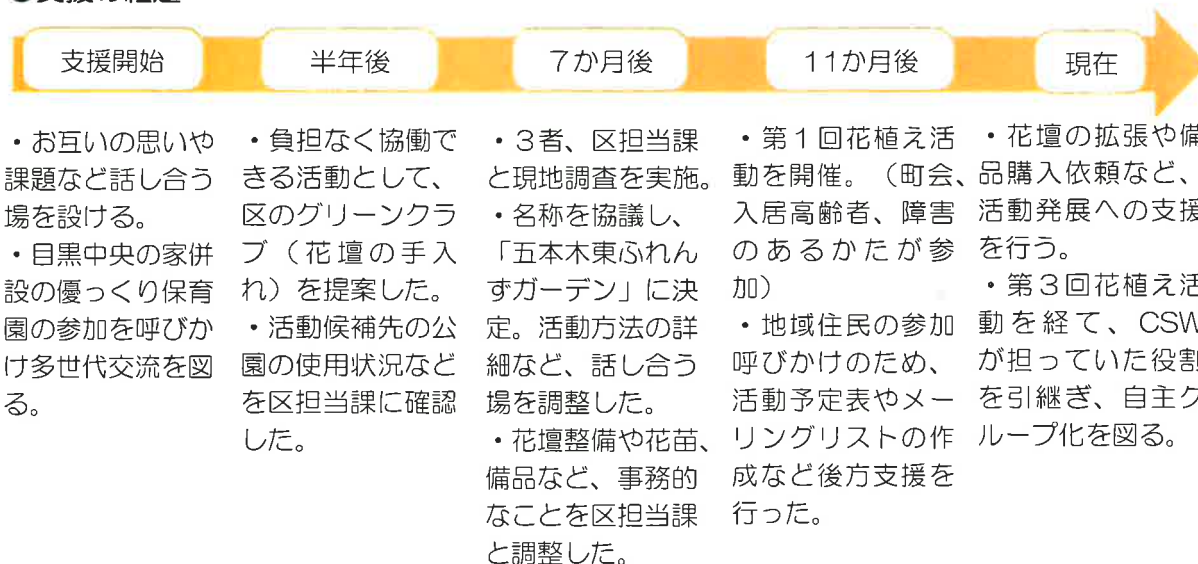
【地域相談事例② 地域づくり】

地域・事業所・施設の思いを形にした地域活動の立ち上げ支援

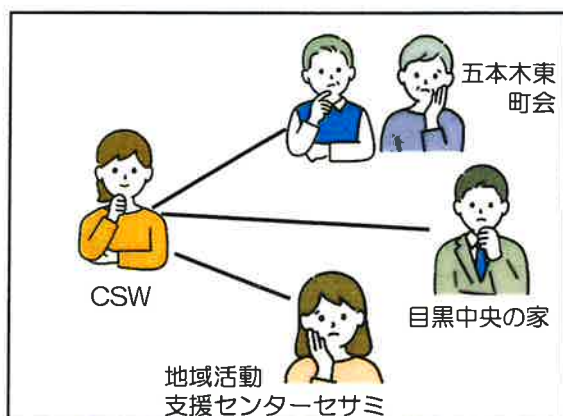
●相談の概要

相談者	五本木東町会、特別養護老人ホーム目黒中央の家、地域活動支援センターセサミ
内容	地域で何か始めたいがどうしたら良いか分からない
状況	同じ時期に、町会、高齢者施設、障害者支援事業所から、「他の町会のように何かをしたい。どのように進めたらいいか」「地域のかたと施設利用者が活動を通じて交流する機会をつくりたい。どうつながりをつくれればいいか」と地域活動や住民交流について相談を受けました。それぞれの団体は同じ課題を抱えており、3者に集まってもらい話をしました。

●支援の経過



●立ち上げ前



●立ち上げ後



●団体からの声

町会として何か取り組みたいと思っていましたが、経験がなく、高齢化もあり、どうしたら良いか悩んでいたところ地域活動の提案を受けました。現在は近隣のかたが水やりをしてくださったり、子どもたちがカタツムリをみつけたり、蝶々を捕まえに来る親子がいたり、今後も3者と地域の皆さまとの交流の場になっていくことを期待したいと思います。（五本木東町会）



これまで、地域と何かやりたいと思ってはいましたが、なかなかその方法が分からずにいました。この活動をきっかけに、地域の皆さんとつながることができて、嬉しく思います。また、この活動を機に、町会活動への参加にも繋がりました。保育園児もじょうろを持って散歩することが日課となり、地域のかたとの交流も増え、楽しみが増えました。（目黒中央の家・優っくり保育園）

コロナが落ち着き、利用者と地域のかたが交流できる機会を考えていました。花壇や公園の整備だけではなく、プレート製作作業など、皆さんと一緒に活動できることが嬉しいです。

（地域活動支援センターセサミ）



●成果

偶然にも、3者が同じ町会内だったことから、個々で聞き取った課題を、一つの「地域課題」と捉え、協働で活動できる「美化活動団体」の立ち上げにつながりました。花植えや水やり、プレート作りなど、活動を通じながら、地域住民と認知症高齢者や障害のあるかたとの交流を深めています。



▲第1回花植えの様子

●今後の方向性

今後は自主グループとして、地域に根付いた活動として続いていくとともに、社会資源の一つとして、社会参加のきっかけや多世代交流の場、地域の皆さんの居場所になることを期待しています。

また、周辺の保育園や障害児者の支援事業所とも連携をしながら、子どもから、障害のあるかた、高齢者等、誰もが気軽に参加できる場になれるよう支援していきます。



▲花種名のプレートづくり



▲プレートが加わりさらに華やかになりました

全域での取組① ひきこもり状態に悩むかたへの支援

ひきこもりに関する理解を深め、本人とのかかわりや居場所について考える学習会を開催したほか、NPO法人楽の会リーラや区と連携して、居場所づくりに取り組みました。また、立ち上げ後2年目となる、家族会『リプルめぐろの会』のサポートを行いました。

家族のためのひきこもり学習会

家族のためのひきこもり学習会・茶話会（令和6年1月）

第1部 講演会

「こころがホッとする居場所はありませんか
～家族の向き合い方～」
講師 青少年健康センター副会長 井利由利氏
参加者数 40人

第2部 茶話会

家族会の雰囲気をイメージできるよう、講演後に
茶話会を開催し、家族会をご紹介しました。
参加者数 20人



▲家族のためのひきこもり学習会

ひきこもり状態に悩むご本人への支援・家族会への支援

「居場所の出前」（NPO法人楽の会リーラとの共催）（令和6年3月）

人間関係が苦手・ひきこもりなど、様々な生きづらさを抱えているかたとそのご家族などを対象に初めて開催しました。巣鴨にある「カフェ葵鳥」からピアサポーターである、ひきこもり経験者や家族ボランティアに協力していただき、家族会『リプルめぐろの会』の会員とともに、交流の場を持ちました。

参加者数 27人

リプルめぐろの会への支援（通年）

月1回開催している家族会に、CSWも毎回参加し、新たな参加者の紹介や情報提供など、安定・継続的な運営が図られるよう側面的な支援を行いました。



▲「居場所の出前」の様子

今後の方向性

アンケート結果や家族会での声から、当事者が人とふれあい気軽に過ごせる場が求められているため、具体的に居場所づくりに取り組んでいきます。また、ひきこもり学習会の継続的な開催や家族会の運営支援を通して、悩んでいる家族や当事者を適切な支援に結び付け、家族会につなぐことができるよう、引き続き区関係所管と連携していきます。

全域での取組② 出張相談の実施

令和5年度からの新たな取組として、区内で食支援の活動をしているNPO法人フードバンク目黒や、区内の子ども食堂など、地域団体や施設での活動の場での出張による相談会を行いました。窓口で相談を待つのではなく、区民の皆さんが身近な場所で気軽に相談できるようCSWが地域に出向きました。

出張相談会
実施回数

13回

フードバンク目黒での食料配布会、子ども食堂、めぐろプレーパークキャラバン、田道ふれあい館まつり、イオンスタイル碑文谷



▲出張相談（上：田道ふれあい館まつり）
（下：カトリック碑文谷教会）

■今後の方向性

活動者も含めて、地域の皆さんにCSWを知っていただく機会になりました。同じ場所で回を重ねて相談会を実施していくと、その方のタイミングで相談することができたり、CSW側からも継続的に見守ったりすることができると、異変に気付いた時に声を掛けやすいというメリットがあります。今後も、地域に出向き、行政や福祉の専門職へのつなぎ役を果たしながら、その方に寄り添った支援を行っていきます。

全域での取組③ 情報発信・活動周知

ささえあい
レポート

年3～4回発行。CSW・生活支援コーディネーターが把握した地域資源や地域住民の声を伝えています。

ホームページ

ささえあいレポートの掲載、イベント告知、活動報告書の掲載

Facebook

「CSWのつぶやき」は月2回更新。団体や地域の催しに出向き取材した内容や、CSWの日頃の取組などを紹介しています。

その他PR

めぐろ区報での特集記事掲載、区総合庁舎ロビーでのパネル展示

地域で見聞きしたちょっといい話や団体の紹介、活動状況などタイムリーな情報を発信しています。

■今後の方向性

これまで以上にホームページやFacebookを活用した情報発信に力を入れ、情報の掲載頻度を増やすことでCSWの取組を多くの世代に広く周知していきます。区民やさまざまな団体をつなぐ、つながる、つなげるをモットーに活動周知を行っていきます。



目黒区における協議体

介護保険法に基づく生活支援体制整備事業における「協議体」は、情報共有及び連携・協働による資源開発等を推進するために、多様なサービス提供主体が参画し、定期的な情報の共有・連携強化の場として区市町村が設置することとされています。

目黒区では、平成29年度から30年度にかけて、区内の5つの地区（北部・東部・中央・南部・西部）を日常生活圏域として、それぞれ第2層協議体が設置されています。各地区の協議体は、生活支援コーディネーターが事務局機能を担い、地域住民や活動団体とともに運営しています。

町会・自治会、住区住民会議、民生児童委員、ミニデイ・ふれあいサロン活動者、竹の子クラブ（旧老人クラブ）、社会福祉法人、NPO法人、地域包括支援センター、介護保険事業所、見守りボランティアなど、地域活動をしている方々が参加しています。協議体を構成するメンバーは地区ごとに異なり、地域の実情を考慮しつつ、メンバーの知識経験によるアイデアを出し合いながら、オリジナリティのある活動をそれぞれの地区で展開しています。

また、事業創設当初は、高齢者を主眼に置いた地域の支え合いを話し合う場としての協議体でしたが、活動を進めていく中、コロナ禍も経て、高齢者だけでなく、これからはもっと若い世代のかたと一緒に取り組んでいくことが必要ではないかとの意見が出始めています。国で言うところの「地域共生社会の実現」に向けて、今後はより幅広い世代を対象に地域の支え合いを柔軟に考えていくことが求められています。

北部いきいき🍀支え合いネットワーク会議（ほくいきネット）

●令和5年度の活動

令和4年度に作成した情報紙「北部いきいきおでかけマップ駒場・菅刈エリア」に引き続き「東山・烏森エリア」の作成に取り組みました。また、6年度に向けて、情報紙を活用したイベント「ほくいきひろば」の開催内容について話し合いを進めました。

開催回数	6回
話し合いの内容	情報紙作成、イベント検討、地域情報共有
イベント等	「北部いきいきおでかけマップ東山・烏森エリア」発行



▲会議の様子

【コーディネーターより】

情報紙の作成では、メンバーに、普段暮らすエリアとは別のエリアへ取材に向いていただいたことで、新たな出会いを生むほか、昔の知り合いに再会するなど、様々なきっかけをつくることができました。

今後は、イベント「ほくいきひろば」を、テーマ別で3回開催することが決まっています。既存活動における新規参加者の獲得から、さらに地域が元気になることを目指しています。

これまで培ってきた人脈を大切に、作成した情報誌を活用しながら、新たに人や地域をつなぎ、担い手や社会資源を増やしていきたいと考えています。



▲情報誌
「北部いきいき
おでかけマップ」

東部ふれあい協議会🌸(とうふれ協議会🌸)

●令和5年度の活動

地域のサービスや社会資源などの情報発信のほか、活動団体や活動者同士のつながりを通して地域のネットワークを広げることを目的とした「東部地区ふれあいフェスティバル」を『特別養護老人ホームこぶしえん』の地域交流スペースで開催しました。また、地域の活動者を招いて活動紹介を行い、地域情報を共有しました。

開催回数	5回
話し合いの内容	東部地区ふれあいフェスティバルについて
イベント等	東部地区ふれあいフェスティバル



▲会議の様子

【コーディネーターより】

「東部地区ふれあいフェスティバル」は、200人近くの参加者に来場いただき大盛況のうちに終えることができました。フェスティバルの回数を重ね少しでも多くのかたに情報を届けることができたのではないかと感じました。

また、フェスティバル開催後、ミニデイサービスや障害者施設、児童館など21の出店団体の交流を目的とした情報交換会を実施しました。交流を通じて団体同士の新たなつながりができ、協力関係を築くことができました。

今後も、誰もが安心して生活・社会参加できる地区にしていくため、地域の課題に目を向け、必要な情報が何かを考えながら取り組んでいきます。



▲東部ふれあいフェスティバル

中央まるごとネットワーク🍀(まんなかネット)

●令和5年度の活動

昨年度発行した中央地区の地域活動情報誌「まんなかネットささえあいガイド」に掲載された地域団体の活動周知を目的に、9団体の協力を得て、「地域活動体験会」を開催しました。また、中央地区内の障害者福祉施設の商品を景品にし、販売先などを案内しました。

開催回数	6回
話し合いの内容	情報誌の配布・活用について 地域活動体験会について
イベント等	地域活動体験会



▲会議の様子

【コーディネーターより】

「ささえあいガイド」が高齢者の社会参加の足掛かりとなるよう、町会役員や竹の子クラブでの配布のほか、民生児童委員のご協力で、多くのひとりぐらし等高齢者の手元に届けることができました。

「地域活動体験会」では、活動を複数体験してもらう仕組みとしてスタンプラリーの企画、体験を通じて、その後の活動参加につながるかたもいました。今後も住民の社会参加に向け、地域活動者につながる機会や、情報発信、イベント企画等に取り組んでいきます。



▲地域活動体験会の様子



南部支え合いまち会議（なんまち会議）

●令和5年度の活動

コロナ禍で失われてしまった、人と人がつながるきっかけをつくることを目的に「支え合いまち講座 みんなで話そうご近助物語」を2回開催しました。また、メンバーのそれぞれの日々の取組や地域で起きていることの情報交換をしました。

開催回数	6回
話し合いの内容	支え合いまち講座について
イベント等	支え合いまち講座（原町編） 支え合いまち講座（向原編）



▲会議の様子

【コーディネーターより】

これまで、5年間に渡り「支え合いまち講座 みんなで話そうご近助物語」を開催してきました。身近な地域で活躍するかたをゲストスピーカーに招き、多くのかたに参加いただき、新たなつながりが生まれる機会を創出することができたと思います。

今後のなんまち会議では、今までの取組を振り返り、人と人とのつながりを広げるために必要なことや、できることを改めて検討します。



▲支え合いまち講座

西部支え合いまち会議（にしまち会議）

●令和5年度の活動

住区エリアごとの地域課題に対する意見交換や、活動者や住民同士のネットワークづくりを目的として、イベント「支え合い・いどばた会議」の東根編と大岡山西編を開催しました。また、イベントと連動して、地域活動の情報を集めた「にしまちいきたより」を発行しました。

開催回数	5回
話し合いの内容	発行物の掲載内容、支え合い・いどばた会議について、地域情報の共有
イベント等	支え合い・いどばた会議（東根編） 支え合い・いどばた会議（大岡山西編）



▲支え合い・いどばた会議（東根編）

【コーディネーターより】

「支え合い・いどばた会議」は、地域の活動者が一堂に会し、安心して暮らしていくためにどうしたらいいか、ざっくばらんに話し合う機会となりました。意見交換された内容はにしまち会議で検討し、地域で支え合い活動を広げていくための取組に繋いでいきます。引き続きイベント開催を通して、小エリアでの地域課題の把握とネットワークづくりを進めます。



▲にしまちいきたより（大岡山西編）

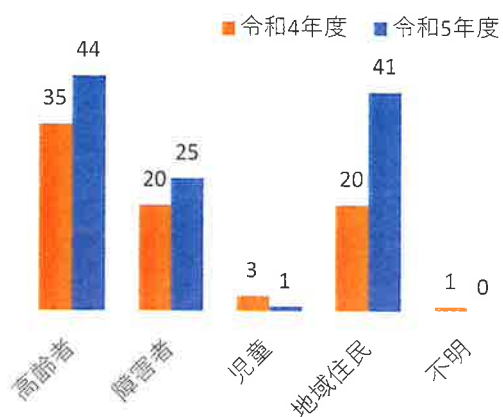
4 活動実績

活動実績① 個別相談支援

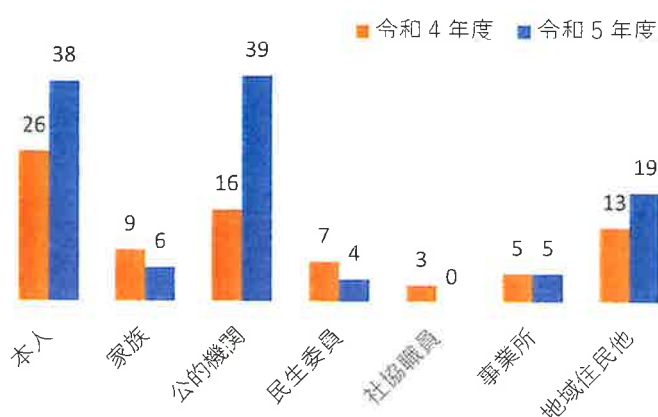
●相談件数

令和 4年度	新規	継続延べ件数	令和 5年度	新規	継続延べ件数
	79件	834件		111件	1,424件

●本人属性



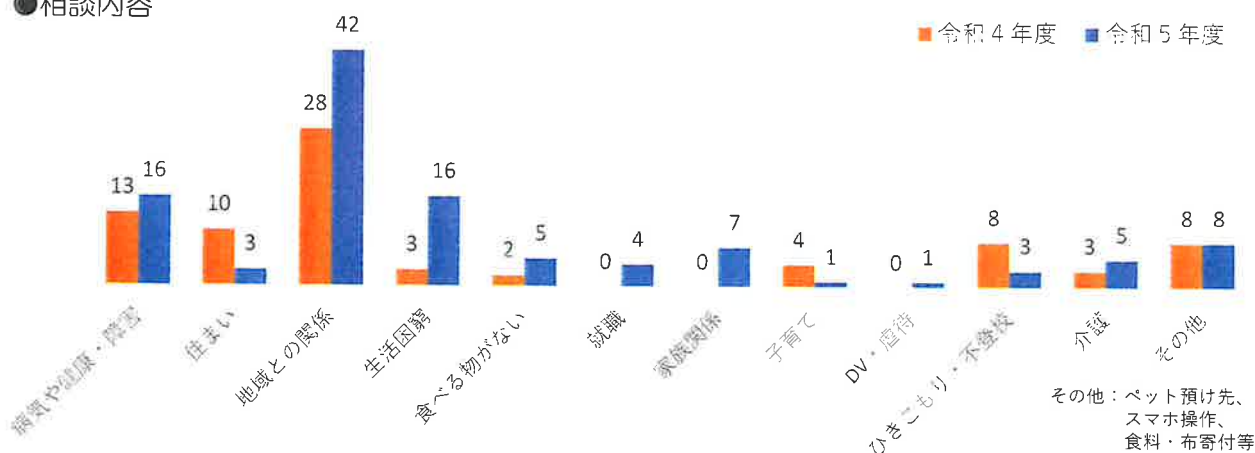
●相談経路



相談件数は令和4年度に比べて増加しており、中でも、本人属性の「地域住民」が大きく増加しています。「地域住民」とは、生活困窮やひきこもり、ご近所トラブル（庭木や騒音）など、高齢・障害・子どもの3分野に当てはまらないかたを分類しています。令和5年度は、フードバンク団体での出張相談（生活困窮に該当）を新たに開始したことが、数を押し上げた要因になっています。

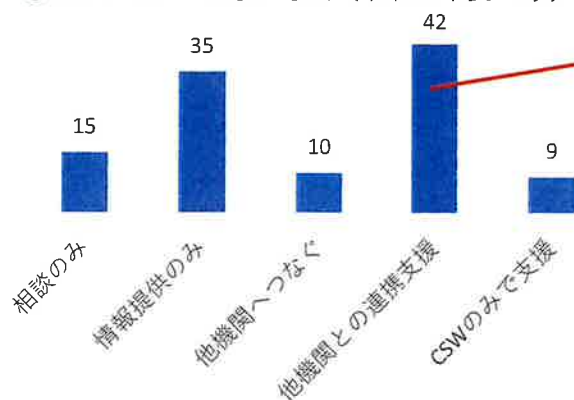
相談経路では、本人や公的機関、地域住民他からの相談が増加しました。CSWが配置されて3年目となり、地域の中での周知が進んできたと言えます。特に、公的機関からの相談は2倍以上の伸びを示していますが、実際の相談を積み重ねていく中で関係機関との連携が進んできたためと思われます。

●相談内容

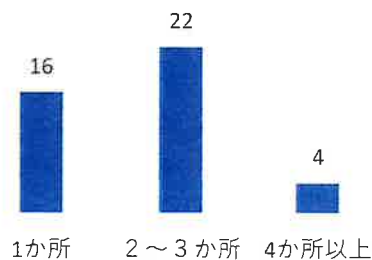


相談内容では、令和4年度に比べて「地域との関係」及び「生活困窮」に関する相談割合が増加しています。「地域との関係」の中で、目立ったものとしては、地域とのつながりを求めるもの、庭木や騒音などの近隣住民との問題、食料や布などの寄付の申し出などがありました。令和5年度は新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、地域活動が徐々に再開され、個人の意識が外（地域）へ向き始めたためと思われます。

●新規相談への対応方法（令和5年度のみ）



●「他機関との連携支援」のうち、1件の相談に対して連携した機関数

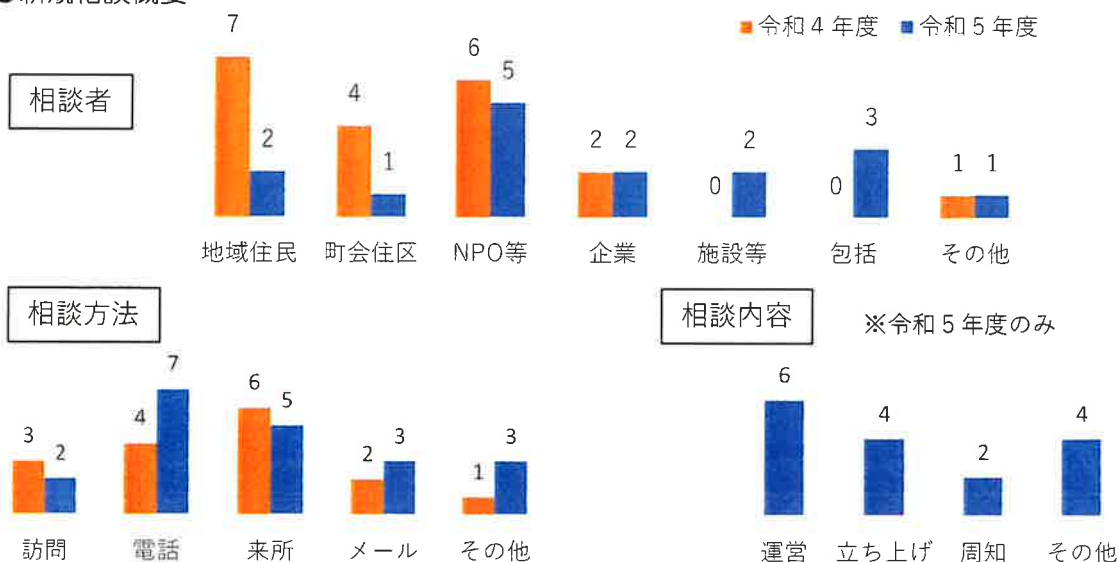


新規相談への対応方法では、CSWのみで対応した相談が全体の約22%でした。中には、課題解決を求めるというより、誰かに話を聞いてほしいという「寄り添い」支援を求められる相談も一定数ありました。残りの約78%は他機関の情報提供や連携が求められる相談でした。「他機関との連携支援」を行った相談が最も多く、2か所以上の関係機関と連携した相談が60%を超えています。連携先としては、地域包括支援センターが多く、地域のサロンや子ども食堂、NPO法人などの地域活動団体も総数で拮抗しています。個別相談は、福祉課題を解決に向けて専門的支援が必要な相談と、居場所探しや寄付希望など地域とのつながりを求める相談に二分されています。

活動実績② 地域相談支援

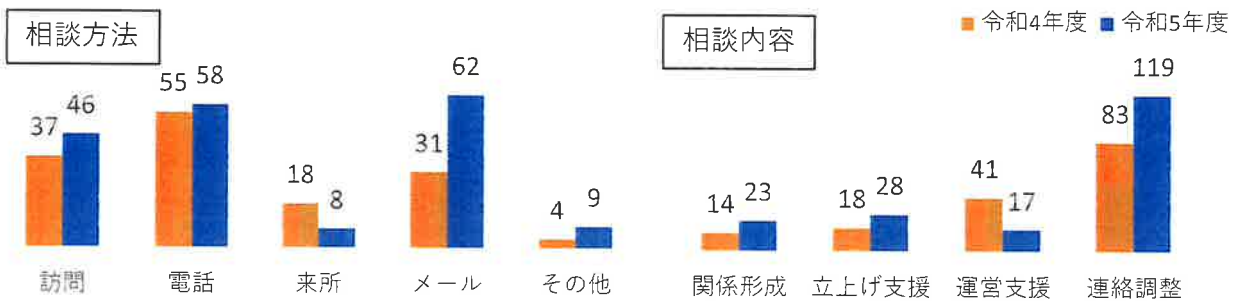
令和4年度	新規	継続延べ件数	令和5年度	新規	継続延べ件数
	20件	145件		16件	183件

●新規相談概要



令和5年度は、団体や施設等、関係機関からの相談が多くありました。新型コロナウイルス感染症が5類に分類され、これまで制限のあった施設や事業所が、地域に向け取り組み始めたことが考えられます。

●継続対応概要



関係形成や立上支援、運営支援では、相談者をはじめ協力者等との間に齟齬が生じないよう、顔を合わせる機会を積極的に設けることを意識して取り組みました。関係者同士の関係形成ができれば、CSWは連絡調整役として、一歩引いた見守り役として対応をしています。

相談を受けて、居場所や地域活動が立ち上がったケースは2件ありました。地域にネットワークを持つCSWが仲介役を務めたことで、分野や世代を問わず、同じ思いや考えを持つ方々が、つながることができました。

また、子どもの居場所や多世代交流の相談が多く、関心はあるが、立ち上げ方法や周知方法が分からず、相談に至ったという声も多く聞かれました。

継続対応を経て、居場所や地域活動が立ち上がった後は、相談対応としては終了し、社会資源の一つとして、引き続き、活動の後方支援等を行い、切れ目のない関わりを続けています。

活動実績③ 生活支援コーディネーターの取組

●生活支援コーディネーターの対応件数



●コーディネーターの取組内容

- ・社会資源の把握、ニーズの把握
- ・協議体開催のための連絡調整
- ・協議体の地域情報誌に関する活動
- ・協議体の開催イベントに関する活動
- ・各会議への出席

生活支援コーディネーターの増員が影響したと思われますが、全体的に対応実績が増加しています。「その他」が令和4年度と比べて2倍以上の伸びとなったのは、「その他」は、手紙やFAXなどのほか、コーディネーターが「出先で偶然出会って立ち話的に相談や情報交換を行った」場合の対応数も含まれていることから、コーディネーターが日頃の活動を通じて、地域のかたと言葉を交わす機会が増えていると言えます。

対応内容では、協議体の運営に伴う連絡調整や地域活動を把握するための訪問、情報交換が大きな割合を占めています。令和5年度は、協議体のつながりから、竹の子クラブ連合会主催の輪投げ大会にコーディネーターがチームとして参加させていただきました。

5 まとめ

CSWが配置されて3年目となった令和5年度は、5地区に2人配置の計10人体制となりました。地域住民の方々や各関係機関への認知度も少しずつ向上し、関係性が構築されてきました。

令和5年度は、日頃の関わりの中で分かってきた地域の方々の思いやニーズをつなぐ形で、「五本木東ふれんずガーデン」や「いどりふれいす」などの新たな社会資源の創出に携わることができました。

また、出張相談の実施など、地域活動の場にCSWが出向く頻度を増やすことで、相談を見つける仕組みを整えていくことができました。CSWが地域で受ける相談は、「相談の芽」の状態であることが多々あります。早い段階で情報を提供することで、将来の心配事を少し軽くしたり、問題の深刻化を未然に防ぐなどの役割も果たしています。このほかにも、CSWの活動を紹介した「CSWのつぶやき」をSNSで定期的に発信し、CSWを多くの世代のかたに知っていただけるよう努めました。

これからも、制度の狭間にある相談、相談の手前の相談など、身近な距離感で、相手の声や思いに耳を傾けていきたいと思います。

6 今後の展望

■ 積極的なアウトリーチによる相談

CSWの相談は、地域に出向く中で見つけていく姿勢が大切です。窓口に座って待つのではなく、こちら側から相談を迎えに行く。令和5年度から始めた出張相談をさらに充実させて、地域のニーズを把握していきます。地域活動の場に積極的に出向き、「ちょっとあの人(CSW)に聞いてみようかな」と思い浮かべてもらえるような関係性づくりに努めていきます。

■ 個別ニーズから地域につなぐ丁寧なマッチング

個人と個人、個人と地域、地域と地域、企業と地域、それぞれのニーズを、強みと使いが生かされるよう丁寧なつなぎを行っていきます。世代や属性・背景の異なる人との出会いと交流から生まれる化学変化を地域の方々と共に楽しみながら、地域共生社会の実現に向けた地域づくりに取り組んでいきます。

■ 重層的支援体制整備事業の着実な実施

令和6年度から目黒区で本格実施された重層的支援体制整備事業について、参加支援、地域づくり、アウトリーチ等の事業が円滑に進むよう関係機関との連携を図りながら、地域での取組を着実に進めていきます。



令和6年9月発行

発行：社会福祉法人 目黒区社会福祉協議会

編集：目黒区社会福祉協議会 地域支援課 ささえあい係

東京都目黒区上目黒2-19-15 目黒区総合庁舎別館3階

電話：03（5708）5792 FAX：03（3711）4954